



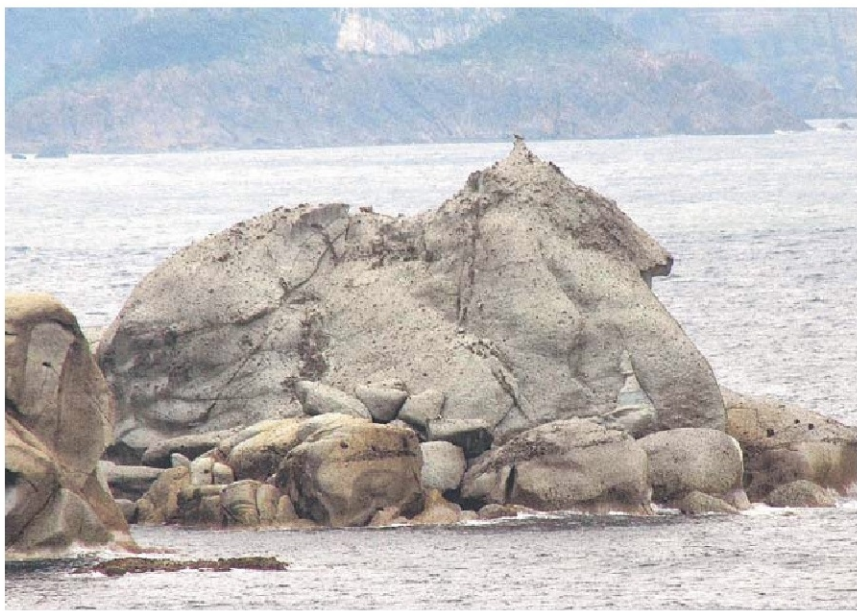
渡辺 大直

代や照来」と答えてしまっている。

豊岡からの帰り道。道を変えて海岸回りで帰ってみようと思い立った。真つ平らな水平線と変化に富んだ崖や岩が雄大で迫力のある景色をつくりだし、所々にあるパーキングエリアに車を止めて眺めると、それぞれに違つ表情で楽しませてくれた。

しかしそれ以上に、このジオパークに指定された山陰海岸に連なる相谷、安木、浦上などの集落名がいずれも昔のタネウシの名前で、「こが」城崎系但馬牛の故郷であることを思い出させてくれた。

現在この辺りでは牛を見掛けなくなった。「但馬牛の故郷は？」と尋ねられると、「小



牛によく似た形の岩。かつては海沿いの集落でも立派な牛を産出していた

地のブランドネームのようでもある。

地図に昔のタネウシの名前になった集落をマークすると、竹野川流域、佐津川および土生川流域、それに矢田川流域とこれらをつなぐ海岸沿線が城崎系但馬牛の故郷であることが分かる。

そんな城崎系タネウシの中で、「第四相谷」と「第六相谷」は1946年から但馬牛の育種資源として作った「よし蔓」の中心にいた牛だ。現在の種雄牛の中では、エースの丸宮土井、若手の宮喜、宮菊城は彼らの血を引き、但馬牛の多様性を高める。大きな使命を帯び、活躍が期待されている。

今子浦大引きの鼻にある、座って大海を眺める牛に似た岩が「任せとけ」と言ったような気がした。

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

但馬牛もう一つの故郷